

## 【第6回】

### 「就労」と「雇用」の間で

人は何故働くのだろうか？生活の為、人生を豊かにする為、人により様々なのかもしれないが、やはり「自分は生きている」という実感がそこで得られるからではないのだろうか。「仕事を楽しめない人間は人生の時間を浪費しているに過ぎない。」という、以前読んだ本の一節が、今も胸に残る。

ワークショップ・チボリでの自分の仕事を改めて振り返ってみる。チボリは「就労継続支援 B 型」と「生活介護」のサービスを提供しているが、どちらの事業とも「働く」ことの提供をコンセプトとしてきた。現在、利用者に支払う工賃を上げるために売上の増加を図りつつ、新たな支給基準を考えているところである。今までは売上をほぼ平等に分け合ってきたが、一人ひとりの作業量や実労働時間には大きな差が生まれており、より働いている利用者にとっては今の状況はむしろ「不公平」にみえる。

とはいえ、実際に取り組んでみると様々な意見や考え方が渦巻き、改定を考え始めて長い時間が過ぎてしまった。障害が重い方には、ごく部分的に作業に参加してもらっているが、働くことに付き合ってもらっているという感じさえしてしまう。だからといって、その時間を散歩やドライブに置き換えれば良いというわけではなく、利用者本人たちが何をどうしたいかということを受け止めながら、提供できるプログラムがあまりにも貧困といわざるを得ない現状にある。これは障害の重たい人ほど受け皿がないという、この地域の問題とも重なってくるのだが、彼らにとって「生きた時間」の提供を本気で考えていかなければならない。合わせて、そんな彼らへ支払うべき「工賃」の妥当性の検討も課題である。

一方、一般就労を目指す利用者への支援については、もう少し具体的である。これは就職したい、稼ぎたいという本人の希望が明確でその目的を共有でき、支援者もハローワークや就労支援センターといった外部の機関と連携をとり、ネットワークも構築できる。しかしながら、一般企業や事業所での実習等を体験すると、チボリでの「仕事」と実際の就労には大きな隔たりがあることに気づかされ、利用者の戸惑う姿を見ることが多い。確かに、採用されれば「工賃」の何倍もの給料が支給されるのだから仕事内容も厳しくなるのは当然である。

改めて、チボリにおける「働くこと」への支援が十分ではないことに気づかされる。それは福祉の場であることに「甘え」があり、特に、支援者側に利用者がいずれ一般事業所に「雇用」されるための段階的な準備としての職業訓練プログラムの準備ができていなかったということである。実は、そのような過程を雇用する企業側と共有することが、障害のある人たちが働きやすい環境を創っていくために必要だとは思うが。

障害の重い人と一般企業への就職をめざす人が入り混じって働く「チボリ」で、工賃の支給基準を再考することは、障害のある人たちの「就労と雇用の支援」の在り方を見直すことでもあった。「就労支援」と「雇用」の間に何かがあるとすれば、それは働きたいと願う本人の意思を周りにいる人間がどれほど親身にそして丁寧に受け止めることができたか、しかもそのうえで、いろいろな「運」やタイミングに恵まれることである。これから、誰にも公平にチャンスが訪れ、それを生かすことを応援する人々を増やしていく中で、「働きたい」といったごく自然な思いを保障していきたい。

所員 町田 尚広（ワークショップチボリ）